

ダンス蛇の穴 振子ぴじん 2008年1月13日(日)

○今回の企画に参加するにあたって。

- ・自分がダンスに関わるスタンスを言葉にし、意見を交わすことで、創作の根にある批評意識を自覚できるか。
- ・個人の身体感覚を創作の源泉とするダンスが、集団(社会、民族、歴史)にコネクトする可能性はあるのか、或いはないのか。
- ・その集団とは何か。

○振子ぴじんのダンスの手法。ダンサー。

- ・穴のあるレーダー。無意識の領域に意識が点在する、隙のある体。
- ・動きの命令を忘れたときに動く。
- ・静止にいたるプロセスを誤る、遅延させる。
- ・体をコントロールする支配的な意識で、踊る「私」をコントロールする。

○振子ぴじんのダンスの手法。「振子」の振付。

- ・非一自己懂着状態。踊る「私」、自我のある内面を空無化する。
- ・内面と外面が中立している体。オブジェ。
- ・ダンサーを、動きのモチベーションから解放するためのカウント、細部の指示。

「からだのなかでぬくめたことを、そこいらの雪にばら撒くように、持ちこたえられなくなったように散ってな、ばら撒くことが肝心なのよ。細かい気持などさらさらいらないんだよ。あなたはまさぐっているからすぐ降参したようなおどりをするが、それはただ、からだがあなたにせがんでいるもので、溺れた男にまだ騙されるようなところがあるよ。気をつけなきゃ。酒の上澄みをみがくような心得はな、ほらこうやって。」

土方巽 『病める舞姫』

○作品「振子」について

- ・方法論を意識して、実践できるか。
- ・思想の不徹底性、散漫な志向を受け入れ、納得できるか。
- ・運命に対する態度。不可避の運命に如何にして豊かさを見出すか。
- ・モノが意味付けされる前の無垢な状態に気がつけるか。

○稽古について

- ・現実からも「私」からも遊離しない体のため。
- ・手法を自覚して、掘り下げる。
- ・自分が確認しうる感覚の、もう一枚奥に行く。

○課題

- ・手法を自分の欲求、意図から切り離し、他者が実践できる形にする。
- ・他者の手法を実践してみる。
- ・自分自身にモチベーションを置かない創作の可能性を探る。

○振子びじん略歴

1980年7月11日 秋田県能代市出身

本名 畠山央之

学生時代に舞踏と出会い、大駱駝艦に入団、磨赤児に師事する。

2004年よりソロ活動を始める。

「呪い」「振子」「フルエテ透明」等、作品を発表する。

2006年～07年にジョセフ・ナジの作品「遊*ASOBU」に出演する。